支援者としてのあり方の実践
Ⅰ．アセスメントの意義と要点

知的障害のある
犯罪行為者への支援を学ぶ研修会
〈基礎研修会　中級編〉

２０２１年１０月

水藤　昌彦
山口県立大学／国立のぞみの園
m.mizuto@yamaguchi-pu.ac.jp

この講義の目的と到達目標

【目的】

知的障害のある犯罪行為者への支援にあたって、支援者としてのあり方、特に初級編の内容を踏まえながら、実際にどう思考し、行動するかについて考えること。

【到達目標】

（１）**アセスメントの意義と要点**について説明できる。

（２）**支援の理論的基盤**について説明できる。

（３）**専門職倫理**を踏まえて行動するとともに、**支援者自身を適切にケア**できる。

つまり…

支援にあたって

どう考えて、行動するのか、

どのように支援者自身をケアするか

について学びます

講義の項目

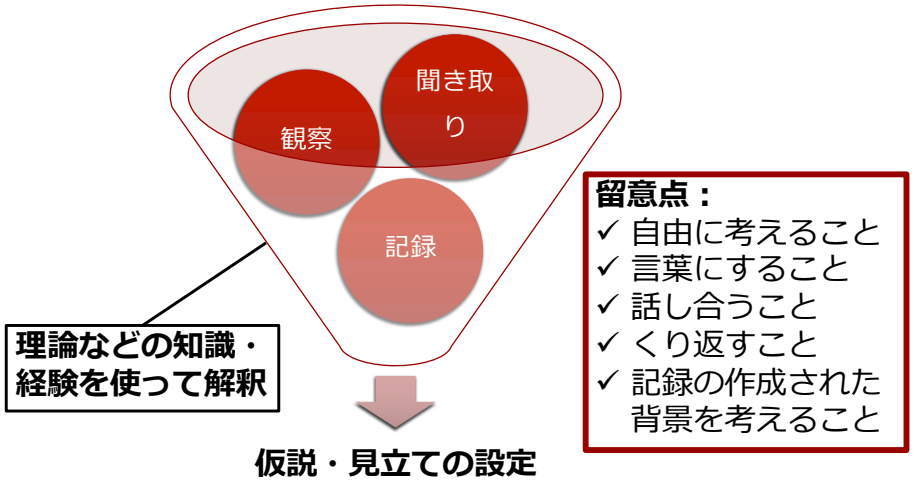
Ⅰ．アセスメントの意義と要点★

Ⅱ．支援の理論的基盤

Ⅲ．専門職倫理と支援者自身のケア

Ⅰ．アセスメントの意義と要点

アセスメントの仕組み：仮説の設定＝見立ての過程



留意点：
- ✓ 自由に考えること
- ✓ 言葉にすること
- ✓ 話し合うこと
- ✓ くり返すこと
- ✓ 記録の作成された背景を考えること

仮説・見立てが必要な理由

- ➢ 支援の根拠を明らかにできる
  - ✓ 考え方「○○○であるから、～かもしれない」→「それでは、△△△をしてみてはどうか」
- ➢ 関係者間で共通理解を形成できる
  - ✓ 言語化し、表現しなければ、他者に考えは伝わらない
  - ✓ 特に多機関連携では重要
- ➢ 内容を繰り返し確認して、見直すことができる
  - ✓ カンファレンスでは、仮説や見立てを共有し、構成員のあいだで検討する

アセスメントにあたっての枠組みが便利な理由

- 複雑な生育歴、多くのエピソード、変化の激しい人間関係
- 情報量の増加、内容の多様化＋複雑化、内容の相反

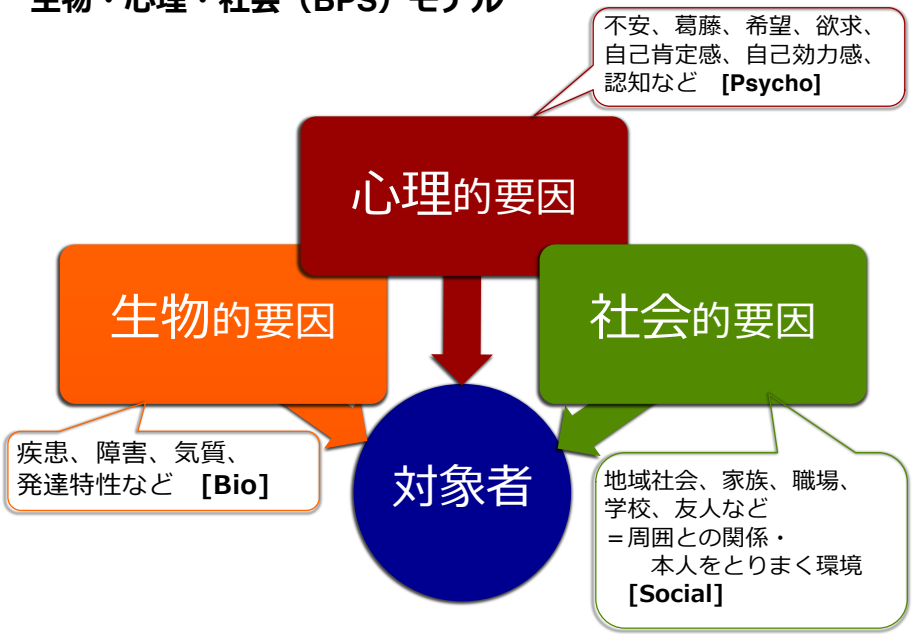
→「何に、どこから手をつけていいのか分からない」

→情報をいったん分類、グループ化すると、整理しやすくなる

「生物・心理・社会モデル」という枠組み

によるアセスメントが有効

生物・心理・社会（BPS）モデル



生物・心理・社会（BPS）モデルの特徴

- ✓ 多元主義　（↔　還元主義）
- ✓ 収集した情報をB・P・Sの３つの要素にいったん腑分け
- ✓ そのうえで、各要素のあいだの相互作用に着目

　＝　分けること自体が目的ではない

- ✓ 総体としての、その人の状態を理解しようとする

BPSモデルの効果

- ✓ さまざまな情報・多くのできごと　→　情報の整理
- ✓ 見立て（アセスメント）にあたっての枠組みとなる

障害と犯罪の「因果関係」の否定

障害は犯罪の間接的要因のひとつ

両者を関連づける他の要因への注目

障害者の経験する社会経済・心理的状況

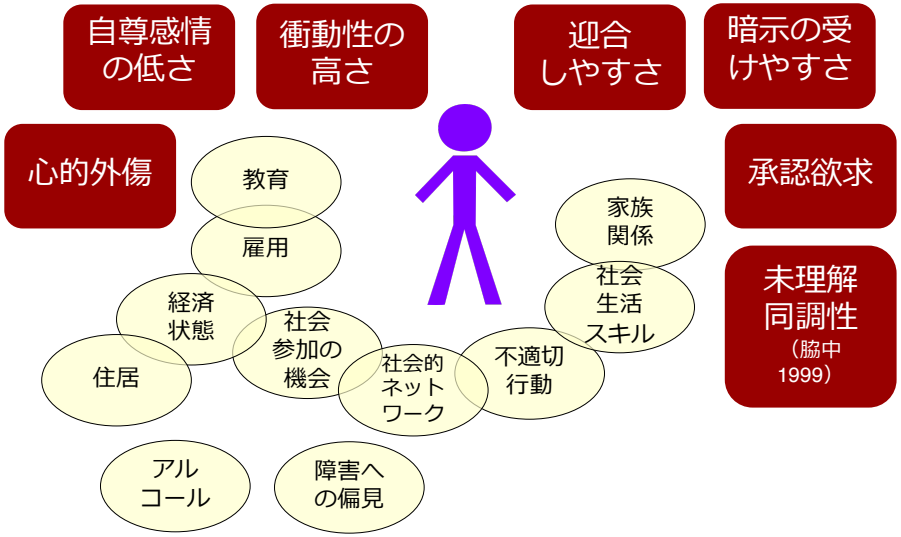
発達障害の二次障害としての非行・問題行動

犯罪行為自体より、背景要因に目を向ける

- 福祉による支援の目的　≠　「再犯防止」
- 社会的孤立や生きづらさの改善・解消　→本人が犯罪をしなくていい生活　→結果としての再犯防止

- **社会経済・心理的要因によるプレッシャー仮説**
  →「社会経済・心理的に不利な状況」が重なり、関係
  →その影響で犯罪行為に至るプレッシャーを高める
  →障害によって不利な状況がより先鋭化、影響が深刻化

社会経済・心理的なプレッシャーの具体例



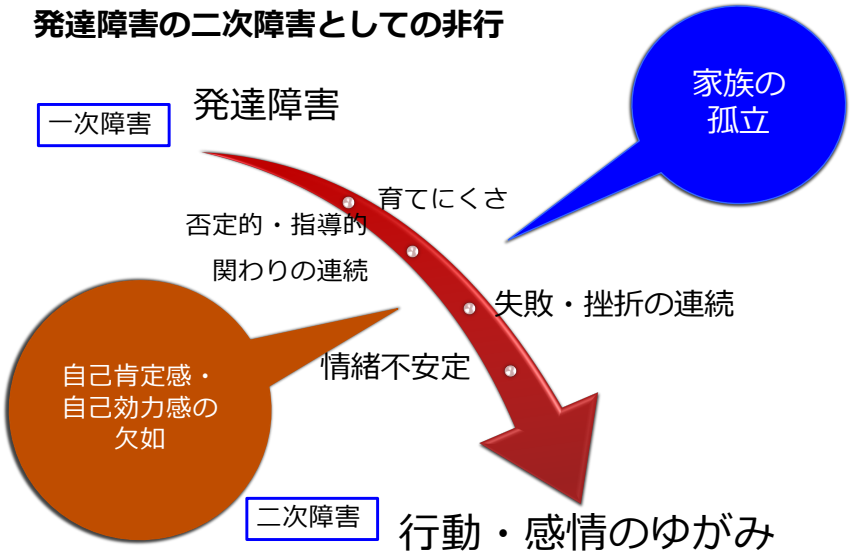
(NSW Law Reform Commission 1996; Cockram, J. 2005 をもとに作成・一部改編)

未理解同調性

- 前提１：人は経験から学習する
- 前提２：人は「うまく」できる状態を好む
- 人は置かれた状況に適応しようとする存在
- 適応するためには状況の理解が必要
- 理解がしにくい　→　自分なりの適応行動をとる
- 結果：（じゅうぶんに）理解していないが、同調する

支援者の理解が不十分であると…
→　故意・悪意でやっている、やる気がないなどの誤解
→　本人への過剰な期待

発達障害の二次障害としての非行



（小栗 2010をもとに作成。一部改編）